

学会受賞報告

International Association for Dental Research (IADR) / Distinguished Scientist Award in Geriatric Oral Research

International Association for Dental Research (IADR) / Distinguished Scientist Award in Geriatric Oral Research を受賞して

包括歯科補綴学分野 小野 高 裕

昨年の7月22日、ロンドンのExCel London Convention Centerで開催されたthe 96th General Session of the IADRにおいて上記の賞をいただけたことは、私にとってまことにOnce in a lifetime honorでした。同時に、これまで歯科補綴学と高齢者歯科学の臨床と研究についてご指導いただいた恩師と諸先輩、また今まで一緒に仕事をしてくれた新潟大学と大阪大学の同僚への感謝の気持ちには言葉に尽くせぬものがありました。さらに、授賞式では、これまで交流してきた友人たちが世界中から祝福に駆けつけてくれたこと、長年支えてくれている家内が見守ってくれたこともうれしいことでした。

本賞は、基礎から臨床までの17の研究分野において、分野の発展に貢献する卓越した研究業績を挙げた会員を毎年1名選ぶと言うものです。新潟大学歯学部では、2012年に宮崎秀夫教授が私と同じGeriatric Oral Research部門で、2016年に山崎和久教授がBasic Research in Periodontal Disease部門で受賞されています。

受賞の対象となった私の研究テーマは、咀嚼・嚥下障害の客観的検査法と口腔内装置によるリハビリテーション技術の開発、さらには咀嚼機能の全身の健康との関わりです。これらは世界に先駆

けて超高齢社会に突入したわが国の歯学の中でも特徴的なテーマであり、これまでに医学、工学、食品学など、歯学以外のさまざまな異分野との交流に学びながら、堀准教授、安川講師らと少しずつ成果を重ねてきました。今後も、新潟大学を中心に、国内外の多くの研究者や企業と共に、一つでも研究成果を実用化し、社会に還元できるよう頑張っていきたいと思います。



写真：左からProf. Nitschke (Zurich Univ.)、家内、私、Prof. Nisizaki (Uruguay Univ.)。私の海外デビューはこの2人のProf. のおかげでしたが、Prof. Nisizakiは本年1月に亡くなられ、Londonでの再会が最後となりました。

日本歯科医学教育学会第16回優秀論文賞受賞報告

歯学教育研究開発学分野・歯科総合診療部 藤井規孝



この度、2018年7月に郡山市で開催された第37回日本歯科医学教育学会学術大会・総会におきまして2017年度に同学会誌に掲載された「新潟大学歯学部における臨床能力評価」(33巻：4-11)が第16回同学会優秀論文賞を受賞致しました。すでに何度か報告されているとおり、本学歯学科の学生は5年次から6年次にかけて担当医の一人として実地に歯科医療を学ぶ診療参加型の臨床実習を履修しており、この論文の内容は学生が臨床実習を通じて身につけた臨床能力を確認するための評価システムについてまとめたものです。診療参加型臨床実習は大変高い教育効果をもつ反面、学生や指導教員には並々ならぬ努力や苦勞が求められ、なによりも実習にご賛同くださる多くの患者さんのご協力なくしては成り立ちません。また、様々なことに質の保証が求められる現代において、このような臨床実習を伝統的に実施することは決して簡単ではありません。今回の受賞が少しでも日頃お世話になっているすべての方々への恩

返しになれば幸いです。

この学会では過去にも優秀論文賞を2016度(第14回)：奥村暢旦先生、2017年度(第15回)：佐藤拓実先生、システム開発賞を2005年度(第3回)：魚島勝美先生、2016年度(第14回)：小田陽平先生がそれぞれ受賞しており、本学の臨床教育は対外的に高く評価され、大いに注目されていると感じています。特に2つのシステム開発賞と今回の受賞は本学臨床実習の運営コンセプトである“ACCEPT project”を支える3つの柱でもあるため、これらの結果のすべてを自信につなげ、本学臨床教育のさらなる充実を目指して努力しなければならないと考えています。最後に引き続き本学の臨床実習に対するご支援、ご理解、ご協力をお願いすると共に改めまして本学臨床実習に関係するすべての方々に厚く御礼申し上げ、稿を閉じたいと思います。ありがとうございました。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。

The 3rd Japan-Korea Joint Symposium Best Poster Awardを受賞して

摂食嚥下リハビリテーション学分野
那小屋 公 太

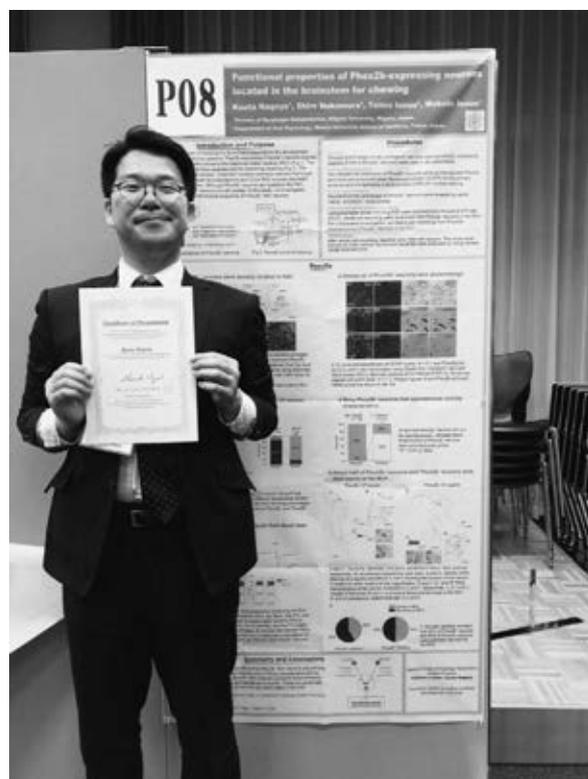
この度、平成30年9月7日に仙台で開催されました第24回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会・日韓ジョイントシンポジウムにおいて Best Poster Awardを受賞致しましたのでご報告させていただきます。「Functional properties of Phox2b-expressing neurons located in the brainstem for chewing.」という演題名にて、咀嚼運動制御に重要と考えられている領域に存在する転写因子Phox2bを持つニューロンの特性について発表致しました。

三叉神経運動核背側網様体（RdV）は、三叉神経運動ニューロンに軸索を送るプレモーターニューロン群が多数分布しており、顎運動制御に重要な役割を果たしていると考えられています。また、RdVには自律神経中枢の発生に関与する転写因子Phox2bを持つニューロン（Phox2b陽性ニューロン）が高密度に分布していることが知られています。そこで本研究では、RdVに分布するPhox2b陽性ニューロンとPhox2bを持たないニューロン（Phox2b陰性ニューロン）の電気生理学的及び形態学的特性を比較検討することを目的に実験を行いました。その結果、Phox2b陽性ニューロンとPhox2b陰性ニューロンは異なる性質を有しており、両ニューロンが協調して吸啜や咀嚼を含む摂食関連行動を調節している可能性が考えられました。

現在、RdVに分布するPhox2b陽性ニューロンに対して、摂食や睡眠・覚醒などの調節に重要な役割を果たしていることが知られている神経ペ

チドであるオレキシンがもたらす変調効果について研究を続けております。今後、咀嚼研究の発展に寄与できるような研究結果をご報告できるよう実験に邁進したいと思います。

最後になりましたが、発表に際しましてご助言頂きました井上誠教授をはじめとする摂食嚥下リハビリテーション学分野の皆様、実験をご指導頂きました昭和大学口腔生理学教室の井上富雄教授、中村史朗准教授にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



日本顎関節学会 学会賞 学術奨励賞最優秀賞（覚道健治賞）を受賞して

顎関節治療部 高 嶋 真樹子

この度、日本顎関節学会雑誌に投稿した論文「顎関節症長期病脳患者におけるエゴグラムチェックリストを活用した自我状態の検討」が、平成30年度学術奨励賞最優秀賞（覚道健治賞）を受賞し、7月8日に福岡で開催されました日本顎関節学会第31回学術大会にて表彰を受けましたのでご報告させていただきます。

この論文は、平成23年に荒井良明先生の指導の元で奥村暢旦先生がデータ収集および日本顎関節学会で発表した内容になります。奥村先生が歯科総合診療部へ栄転された後、データは当医局のハードディスクの中で長期間大切に温かく守り続けられ、腐りかかるも、このたびついに論文として発表をすることができ、このような素晴らしい賞を受賞できたことを大変嬉しく思います。また、私ごとではありますが、この論文のおかげで顎関節学会専門医を取得することができ、2つの意味でかけがえのない思い出深い論文となりました。

顎関節症の症状を呈している患者は、身体的要因と心理社会的要因が絡み合っている事が多く、そのような場合には、顎関節症の症状に対する治療だけではなく、心理・精神的な要因へのアプローチすることが重要となります。この論文では、患者さんの自我状態、すなわち思考、感情、行動パターン、生き方や対人関係の持ち方の傾向などが、顎関節症の病態期間にどのように影響を及ぼしているか、エゴグラムチェックリストという性格分析方法を用いて調査しました。その結果、自己否定および交流回避を特徴とする自我状態を示し、さらに性別が女性であることが、6か

月以上の病脳期間に影響を与えていることが明らかとなりました。本論文が顎関節症治療に携わる多くの先生方の臨床への一助になるのではないかと考えております。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました顎関節治療部部長の高木律男教授ならびに荒井良明先生、奥村暢旦先生、顎関節診療班の先生方、論文作成にあたり統計分析に御尽力頂きました予防歯科学分野の濃野要先生にこの場をお借りして感謝申し上げます。



平成24年度 日本顎関節学会 会場近くにて
(筆者は右から2番目、河村篤志先生撮影)

第11回日本総合歯科学会学術大会最優秀ポスター賞 受賞報告

歯科総合診療部 研修歯科医 阿部 朋子

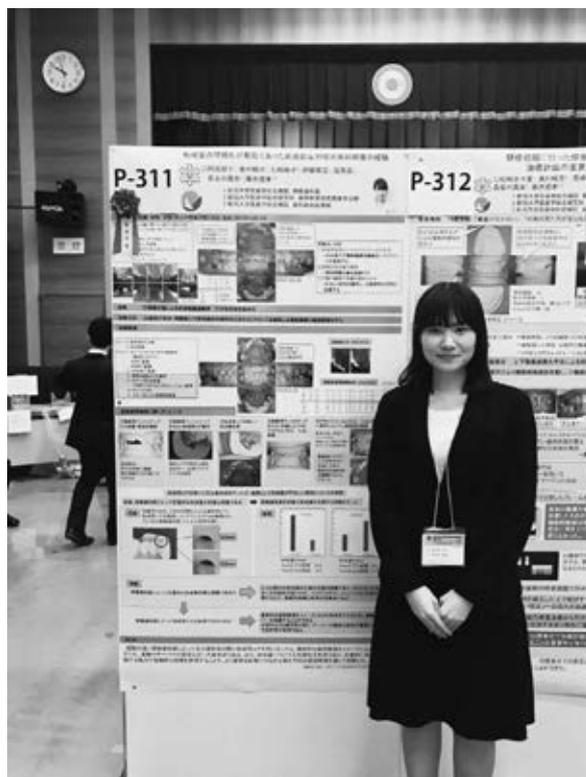
この度、2018年10月に鹿児島で開催されました第11回日本総合歯科学会におきまして最優秀ポスター賞を受賞しましたので、ご報告致します。

歯科総合診療部の研修歯科医は毎年この学会に参加する機会をいただいております、今年は6名の研修歯科医がポスター発表を行いました。

私の発表演題は「形成量の可視化が有効であった前歯部反対咬合歯冠修復の経験」です。前歯部反対咬合のためクリアランスの確保が困難な上顎前歯部に形成確認用コアを用いて歯冠修復を行った症例です。形成確認用コアを用いるなど自分なりの工夫を行いましたが、最終補綴物合着時にクリアランスが不足してしまい、合着後に対合歯で咬合調整を行う必要が生じてしまいました。この問題点を考えた結果、私の形成量の目測がそもそも誤っていたのではないかと結論になりました。そこで「研修歯科医にとって定量的な形成量の目測は困難である」という仮説を立てて簡単な検証を行いました。方法は切縁0.5mm、0.8mm切削した人工歯を用いて、形成用コアを装着しクリアランスが1mm確保されているか同期の研修歯科医17名に回答してもらうというものです。結果は、0.5mmでも4名、0.8mmでは11名が1mm以上であると誤認していました。やはり我々研修歯科医には目視で0.1mm単位の形成量を定量的に把握することは困難であり、他の客観的な指標も併用することが、エラーの少ない診療につながるのではないかと感じました。今回の症例を

通して臨床能力のレベルアップの必要性を痛感しましたので、今後も研鑽をつんでいきたいと思えます。

最後になりますが、藤井規孝教授、本発表をご指導いただきました指導医の奥村暢旦先生、歯科総合診療部の先生方、学会準備のサポートをしてくださった臨床研修センターの皆様、学会準備に協力してくれた同期の研修歯科医の皆に、この場を借りて深く感謝申し上げます。



5th International Conference on Food Oral Processing—The Royal Society of Chemistry Food Group Award 受賞報告

包括歯科補綴学分野 大学院4年 大川 純 平

この度、平成30年7月にイギリスのノッティンガムで開催されました5th International Conference on Food Oral Processingにおいて、The Royal Society of Chemistry Food Group Awardを受賞いたしましたのでご報告させていただきます。Food Oral Processingは、食品摂取について多方面から議論を行う学会として隔年で開催され、口腔生理学や摂食嚥下リハビリテーション学、口腔解剖学、食品科学、栄養学などさまざまな分野からの研究者が集まります。

私は今回、「Impact of Masticatory Performance and Chewing Strokes on Retro-Nasal Aroma」という演題でポスター発表させていただきました。レトロネーザルとは、咀嚼された食塊から放出された香りが咽頭から鼻腔へと流れて感知される経路のことです。例えば、鼻をつまんで食事をするとう味が感じにくくなるように、このレトロネーザルは「美味しさ」に影響を与えています。

我々は、咀嚼能力テストのために標準化されたグミゼリーを用いて咀嚼能率の測定を行っております。咀嚼能率の向上によって食品をより効率良く粉碎でき、嚥下や消化吸収に良い影響を与えられていると考えられていますが、レトロネーザルについての研究はあまりなされておられません。今回、グミゼリー摂取時の香りの強さを測定し、咀嚼能

率・咀嚼回数とレトロネーザルとの関係を明らかにするため研究を行いました。

本研究から咀嚼能率が高いほど、また咀嚼回数が多いほど、食品摂取時においてより多くの香りを放出していることが認められました。「よく噛む・よく噛める」ことが「美味しい食事」を行うのに重要な機能であることを示せたと考えています。今後は、食品の噛み方・飲み方によって、どのような影響を与えるかを研究していきたいと考えています。

最後になりましたが、今回の発表にあたり、ご指導いただきました小野高裕教授、堀一浩准教授、ならびに研究にご協力していただけました方々に心から厚く御礼申し上げます。



第61回 日本顎口腔機能学会 優秀賞を受賞して

包括歯科補綴学分野 児玉匠平

この度、2018年9月29-30日に日本歯科大学で開催されました日本顎口腔機能学会第61回学術大会にて優秀賞を受賞することができました。演題は「液体へのとろみづけが舌運動と舌圧発現様相に及ぼす影響」というものです。内容を簡単に説明させていただきます。舌の動きは緻密でダイナミックなものですが、口腔内の事象ですのでこれまでその動態を観測・測定することは困難でした。そこで近年導入した電磁アーティキュログラフという、舌の表面に直接センサを貼付することで舌運動をモーションキャプチャすることが可能な電磁アーティキュログラフという装置を使って研究していくことになりました。一方で、我々の教室では舌と口蓋の接触圧である舌圧測定を用いた研究が盛んであり、舌機能評価方法として有用であります。しかしながら舌圧は舌と口蓋が接触した時間のみの評価であり、実際の舌の運動自体を評価することはできません。そこで舌運動を解析可能な電磁アーティキュログラフと舌圧測定を併用することとしました。すなわち、口蓋接触時は舌圧で、口蓋接触の前後の舌運動は舌運動解析で評価を行うことでより詳細な舌機能解析を行う、という趣旨の研究になります。

私は普段の外来の診療では義歯を扱うことが多いのですが、舌機能と義歯は非常に関わりが深く、今回の研究で舌運動をたくさん見てきた経験は臨床の場でも生かされていると感じておりま

す。臨床と研究とが相互にリンクしており、臨床での疑問がそのまま研究テーマとして繋がっていることは私にとって非常に高いモチベーションとなりました。現状ではまだ健常者での評価の段階ではありますが、将来的には臨床に直接役に立つような内容に発展していければと考えております。

今回が私の初めての学会発表であり、まだまだ研究についての経験・知識が足りない中での発表でした。発表の順番も最後の方でしたので、発表を終えた熱も冷めないままに受賞の知らせを受けた時はただただ驚くばかりでした。丁寧にご指導いただきました指導医の藤原先生、優しくご指導いただきました小野先生、堀先生をはじめ多くの先生方に助けていただいたお陰です。この場をお借りして感謝申し上げます。



第11回日本総合歯科学会学術大会優秀ポスター賞 受賞報告

歯科総合診療部 研修歯科医 山中 秀 敏

この度、2018年10月に鹿児島で開催されました第11回日本総合歯科学会学術大会におきまして優秀ポスター賞を受賞しましたので、ご報告致します。

私は学会に参加すること自体初めての経験で、発表当日は会場の雰囲気もありとても緊張しましたが、同期の研修歯科医達とお互いに雑談したりすることで緊張をほぐすことが出来ました。発表の際も他病院の先生たちに囲まれながらの発表でしたが練習を思い出してなんとか乗り切ることが出来ました。今回の学会では口頭発表、質疑応答を通して、自分の担当した症例についての理解を深めることができ、大変勉強になったと思います。

今回受賞した演題名は、「顎位が安定しない患者への咬合分析の試み」です。様々な要因から咬頭嵌合位が決まらない有歯顎者において、これを検討する事を目的として咬合分析を行ったという症例です。口腔内所見と患者習慣からは酸蝕が疑われ、恐らくこれを原因として咬合接触部位が消失し、咬頭嵌合位が安定しなくなってしまったといった症例でした。

今回の治療は研修歯科医の身としては非常に難しい試みでしたが、最初にしっかり診査を行うことで現時点での患者さんの問題点を見極め、そのうえで診断・治療を行っていく事が長期間安定した咬合状態を保つために重要であるということを知ることが出来ました。今回の受賞を励みに、今後

もより一層研鑽を重ねて参りたいと思っております。

最後になりましたが、発表直前までとても熱心にご指導いただいた藤井先生、指導医の伊藤先生をはじめ歯科総合診療部の先生方、学会準備のサポートをしてくださった臨床研修センターの皆様、発表までの間協力してくれた同期の研修歯科医の皆に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

